

2019. 12. 21

畑 啓之

畳の上で死ぬことは困難な時代に 核家族化が進み看取ってくれる人がいない

神戸新聞が実施したアンケートは実に衝撃的な結果を伝えている。わかってはいたとはいえ、「やはりそうか」とその結果の重さには注目する必要がある。最期に頼れる人（12月20日）の「最期に気持ちを支えるものごとは？」では「信仰」は紙のように軽い。

神戸新聞 12月11日 自宅で最期6割が「困難」
12日 延命治療95%「望まない」
13日 「死」を話題4割に抵抗感
20日 最期に頼れる人

自宅で最期6割が「困難」

昔の大家族のもとであれば、誰かが、あるいは手分けして看病することができた。しかし、今日のように核家族化が進んでしまえば、介護の負担が誰か一人に集中し、その負担に長期間絶えることは困難である。最近の医療の進歩により命を長らえることが可能にはなったが、終末までの10年間は健康に過ごすことができていないとの統計結果もあり、昔に比べて介護期間は長いものとなっている。昔は寝込んでしまえば、手の打ちようもなく体が衰え、比較的早期に臨終に至った。多くの場合はその死因は老衰とされたものと考えられる。記事の「ピンピンコロリが願望だが、東大へ入るよりも難しいらしい（90代以上の女性）」が印象的であった。

延命治療95%「望まない」

治る見込みのない親族に延命治療を施し、その命を長らえさせたとしても。苦しみの期間を長くするだけで見ているのもつらい。こう考えると、延命治療を望まないが95%と高い値になることが理解できる。「自分自身が不治の病になったときに延命治療を望みますか？」との設問とした場合には、この数値は大きく変わるものと想像される。そのような状況に置かれたときにはいかなる手段を用いても人は長生きしたいと考えるものである。

「死」を話題4割に抵抗感

昔は人は自宅の畳の上で死んだものである。死は自然の営みの一部であり、子供たちも死とはどういうものかを見て知る機会があった。いまはその機会が失われ、アンケートのような結果となっているものと考えられる。

自宅以最期6割が「困難」

65歳以上 家族の負担懸念

神戸新聞社は10、11月、死生観やみとりに関するアンケートを実施した。700を超える回答が寄せられそのうち65歳以上の高齢世代では、半数以上が自宅での死を希望すると答えた。ただ、在宅死を望む人の6割近くは、実現は難しいと回答。一方で、介護の主な担い手とされる中年世代も半数以上が、親などの家族を自宅で見とるのは困難とし、仕事や経済面の理由を挙げた。人生の終わりを巡る理想と現実のギャップが浮かび上がった。

みとる世代も5割が否定的

アンケートは、高年（65歳以上）▽中年（40～64歳）▽若年（39歳以下）の世代別に質問を設定。神戸新聞の双方向型報道「スクープラボ」や読者クラブ「ミントクラブ」紙上で協力

0人、若年91人から回答を得た。

希望する最期の場所を、自宅▽親族など親しい人の家▽病院▽高齢者施設▽その他から選ぶ設問で、高年世代は自宅が52%で最多だったのに対し、中年と若年は自宅と病院がそれぞれ約4割と拮抗した。

高年世代に希望を実現できそうか尋ねたところ、自宅派は「難しい」「どちらかといえば難しい」が59%

本紙アンケート

在宅死を巡る親世代、子世代の回答

自宅以最期を迎えられるように常に家族に話を する (高砂市、60代男性)
娘と同居しているが、自宅以最後まではみられ ないとはっきり言われた (神戸市西区、80代女性)
ピンピンコロリが願望だが、東大へ入るより 難しいらしい (加西市、90代以上の女性)
父母ともに自宅以最期を迎えたので、自分も 在宅がいい (姫路市、70代男性)
実親は愛情を受けた恩返しでみとりたいが、 夫の親は施設に入ってほしい (尼崎市、50代、自営手伝い女性)
介護する自信がない。「目を離したすきに 息を引き取るのでは」と涙が出そう (明石市、50代、主婦)
いずれ限界が来るので、最初から引き取らない (神戸市西区、60代、サービス業男性)
子育てで両親に世話になっていたの、いざ というときはみとりたい (加古川市、30代、女性会社員)

どこで最期を迎えたいか？
(65歳以上)



親族など親しい人の家で
在宅でのみとりは可能？
(40～64歳)



早めに家族で想定を

在宅医療を手掛けてきた「だいたいクリニック」(姫路市)の大頭儀院長の話。納得できる最期を迎えるには、まずは本人が元気づちから具体的な病名を想定し、どうしたらいいかを考えることが大事。家族や医療者に伝えることで、終末期のイメージを具体的に共有できるようになる。家族間でしっかり詰めておけば、本人が死に近づいても家族が慌てることなく、在宅死を希望しているのに救急搬送されることも減るだろう。

に上り、在宅死のハードルの高さを示した。病院派は「可能」「どちらかといえば可能」が81%だった。理由を自由回答で聞くと「子どもの生活を壊したくないから病院希望」「戸屋市、80代女性」など家族の負担を気にする人が多かった。希望は自宅だが、現実困難とした神戸市北区の80代女性は「家族には仕事がある。いつ訪れるかわからない最期に付き合わせるのには申し訳ない」とした。

「在宅を望んでも、最後は救急搬送されてしまいその」との回答も目立った。一方、介護を支えることが多い中年世代に、親など家族の在宅みとりが可能か聞くと、「難しい」「どちらかといえば難しい」が54%に上った。39歳以下は可能「どちらかといえば可能」が54%と逆転。介護が現実味を帯びるにつれ、慎重になる様子が見えられた。

理由を聞く自由回答では「家族生活の集大成だと思ふ」(神戸市灘区、60代男性)など在宅みとりに積極的な意見もあったが、「仕事を辞めると生活が成り立たない」(明石市、40代女性公務員)など経済的理由で困難とする回答が目立った。

本紙アンケート

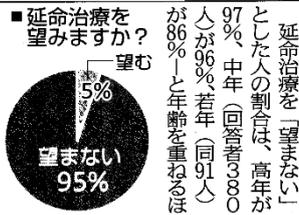
延命治療 95%「望まない」

高年齢ほど割合多く

死生観やみどりについて神戸新聞社が行ったアンケートで、病气やけがで命の危険が迫り回復が見込めない場合、人工呼吸器などによる延命治療を「望まない」とする人が95%に上った。世代別では65歳以上の割合が最も多く、回答した268人のうち260人を占めた。また、何歳まで生きたいかとの質問では、具体的な年齢を答えた人の半数が、平均寿命(男性81・25歳、女性87・32歳)に近い80歳代を挙げた。(28面に関連記事)

「80代まで生きたい」半数

アンケートは10月11日、高年齢(65歳以上)▽中年(40~64歳)▽若年(39歳以下)の世代別に分けて、インターネットなどで実施。10~90代以上の739人が回答した。延命治療を「望まない」とした人の割合は、高年齢が97%、中年(回答者380人)が96%、若年(同91人)が86%と年齢を重ねるほど望む



■何歳まで生きたいか?

49歳以下	1
50~59歳	7
60~69歳	28
70~79歳	98
80~89歳	110
90~99歳	51
100~109歳	4
110歳以上	4
計	586人

ど高かった。男女別では男性(同278人)93%、女性(同461人)96%とあまり差はなかった。死が迫った状態で延命治療には心肺蘇生や気管挿入を入れる気管挿管、人工呼吸器の装着などが挙げられる。これらの治療は生命を維持する一方、口からの食事や声を出すことが難しくなるとされる。

妻を亡くした神戸市灘区の70代男性は「延命治療をあまりすべきではなかった。苦しかったと思つた。振り返り、自身は延命治療を望まないとした。同市西区の70代男性は「延命治療を見ていると人間の尊厳はどうなっているのだろつと考える」と記した。一方、延命治療を望むとした同市垂水区の40代主婦

は、障害のある子どもが手術や経管栄養を何度か経験したといい、「今は『延命をしない』と思つている人も、その時にならないとどうしたいかは分からないのでは」とつづつた。

延命治療を巡っては、総務省消防庁が昨年、全国の消防に心肺蘇生を望まない患者への対応を調査。全体の14%が医師からの指示など一定の条件下で、救急隊による心肺蘇生の不実施や中止を認めている。

鳥取大医学部の安藤泰至准教授(死生学)は「延命治療という言葉そのものに、生活の質が低いまま命を延ばすという悪いイメージがある」と指摘。「医療者は延命治療が一概に悪いのではなく、患者の病状や年齢、環境によって善しあしがあることをしっかり伝える必要がある」と話す。

また、何歳まで生きたいかとの問いには586人が具体的な年齢を記し、半数が80~89歳とした。平均は83・9歳で、男女別では男性85・6歳、女性82・8歳と男性の方が高かった。年代別では若年89・4歳▽高年86・7歳▽中年80・4歳の順となり、若年世代が最も長生きを望んでいる。

(田中宏樹)

「死」を話題 4割に抵抗感

みとりの経験が左右

死生観やみとりへの意識を問う神戸新聞社のアンケートで、自分や家族の死を考えたり話したりすることに心理的抵抗感があるとした人は37%に上った。年代が若くなるにつれて割合は高まり、身近な人の死に立ち会った経験がない人の方が抵抗感は大かった。国は、高齢者らが終末期医療やケアについて事前に家族らと話し合うよう勧めるが、死を話題とすることへの抵抗感依然として根強いことがうかがえる。

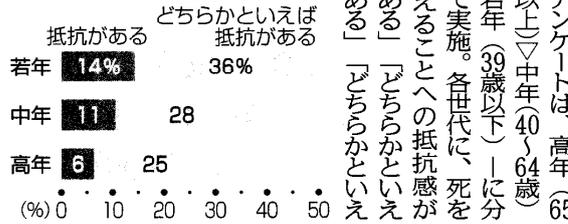
(田中宏樹)

65歳以上48%、「終活」実践

本紙アンケート

- 終活の主な内容**
- ・私的年金や不動産の名義変更
 - ・葬儀会社の選定、積み立ての実行
 - ・死後にしてほしいことを細かくしたため、子どもに手渡した
 - ・市販のエンディングノートに記載
 - ・永眠するお墓を決めた
 - ・子どもたちや親族、友人ら宛てに生前のお礼状を執筆
 - ・財産分与を家族がそろうたびに話す
 - ・自分史の作成。100ページ完成し、まだ続きがある
 - ・施設が載っている記事を切り取っている
 - ・遺影写真や、ひつぎに入れてもらうものを用意

死に心理的抵抗感がありますか？



アンケートは、高年(65歳以上)▽中年(40〜64歳)▽若年(39歳以下)―に分けて実施。各世代に、死を考へることへの抵抗感がよそ3人に1人の31%に上った。

家族など親しい人の死の瞬間に立ち会った経験の有無は、全体の59%が「ある」、41%が「ない」と回答。「ある」人で、死を考へることに抵抗感を持つのは34%だったのに対し、「ない」人は8割高い42%だった。

さらに、高年世代は半数近くの48%が、人生の終わりに向けた「終活」をして

いた。内容は持ち物の整理や遺言書作成、葬儀会社の選定など多岐に及んでいる。

若年世代には死について深く考えた経験の有無を問う、68%が「ある」、32%が「ない」と答えた。

国は、人生の最終盤に受けた医療やケアを事前に家族や医師と話し合う「アドバンス・ケア・プランニング(ACP)」を啓発しているが、死を話題にすることへの抵抗感の払拭が、浸透に向けた課題の一つとなりそうだ。

豊岡市で看護小規模多機能型居宅介護事業所を運営する「ソーシャルデザインリガレッセ」の大槻恭子代表理事(42)は「いきなり死について話すのは壁があるかもしれない」と指摘。「大切にしていくことやこだわりなど、どんな価値観を持つて生きているのかを家族らと話すことが、納得できる最期の選択につながるのでは」と話した。

いのちの物語 アンケート特集

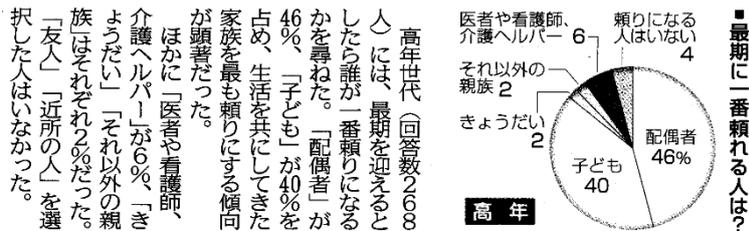
人生の終章へ あなたの思いは

■ 最期に頼れる人 ■

神戸新聞社は死生観やみどりに関するアンケートを実施し、結果の一部を11〜13日の本紙に掲載した。65歳以上の高年世代では、半数以上が自宅で死を希望する一方、そのうち約6割は実現は難しいと回答。また、各世代とも9割前後の人が、死の迫った状態で的人工呼吸器などによる延命治療を望まないと考え、生活の質を重視する傾向も浮かがえた。では、具体的にみどりは誰が担うのか。また、穏やかな最期に向け、気持ちの支えとなるものとは何か。回答者がつづつた、自身の死生観に影響を与えた出来事とともに紹介する。

(田中宏樹、段 貴則)

「みどりは配偶者に」最多

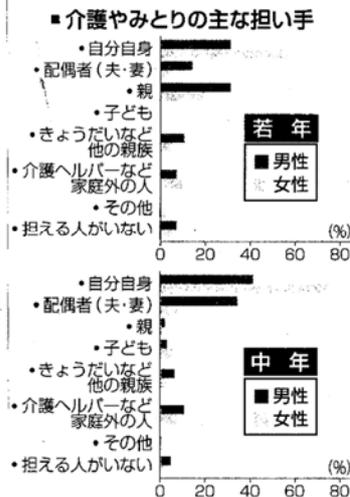


高年世代 (回答数268) には、最期を迎えるとしたら誰が一番頼りになるかを尋ねた。「配偶者」が46%、「子ども」が40%を占め、生活を共にしてきた家族を最も頼りにする傾向が顕著だった。

ほかに「医師や看護師、介護ヘルパー」が6%、「きょうだい」「それ以外の親族」はそれぞれ2%だった。「友人」「近所の人」を選んだ人はいなかった。

■ 介護の主な担い手 ■

家族内で介護やみどりが必要となった際の担い手を、中年世代(40〜64歳)と若年世代(39歳以下)に質問。男女で傾向が分かれた。介護に直面することが多い中年世代(回答数女性265人、男性115人)では、女性の8割近くが「自分自身」と回答し、「夫は1割弱にとどまった。男性で「自分自身」としたのは約4割で、「妻」は3割強だった。

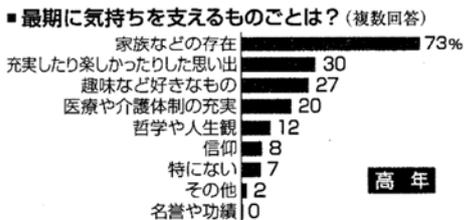


女性は夫をあてにせず

としたのは女性が6割弱、男性は約3割で「親」と並んだ。女性が4人、女性は2人だけだった。

役に立たない「名誉や功績」

最期が近づいたとしたら何が気持ちを支えてくれるかを高年世代に複数回答で問うと、73%が「家族など親しい人の存在」を選んだ。30%が「充実したり楽しかったりした思い出を挙げ、「趣味など好きなもの」は27%、「医療や介護体制の充実」が20%で続いた。「哲学や人生観」「信仰」を選んだ人は少数で、それぞれ12%、8%だった。「名誉や功績」を選んだのは1人だけだった。



■ 気持ちを支えるもの ■

高年